

# 「ライフスキル教育」開発プロジェクトと評価システムの構築 —硬式野球部の取り組みを事例として—

来田 宣幸<sup>1</sup>, 松野 光範<sup>2</sup>, 横山 勝彦<sup>3</sup>

## “Life skill programs” for the student athlete and Evaluation system

Kida Noriyuki<sup>1</sup>, Matsuno Mitsunori<sup>2</sup>, Yokoyama Katsuhiko<sup>3</sup>

Maladaptive of society and action with problem happens frequently in youth. The approach on “Life skill education” started for these problem solving. This study reviews issues present in the certified evaluation system that appeared during the process of its development in improvement of the quality and efficiency of college education. Next, we reviewed psychological scales measuring life-skills. In this article, the authors reported the team building program for the Doshisha University baseball club based on life skill education.

**[Keywords]** Student athlete, Life skill programs, Development of program, improvement of the quality of university

青少年の社会への不適応や問題行動が多発し、昨今においては、青少年期における人格形成教育が問われている。これらの問題解決の手段として、教育現場やスポーツ団体では、ライフスキルと呼ばれる概念に立脚した教育への取り組みが始められている。そこで、本稿では、大学教育の質保証にかかわる動向と仕組みを分析し、課外活動として大学スポーツの位置づけを明確にして、ライフスキル教育の評価システムの構築を試みた。また、それとともに、ライフスキルに関する心理尺度および評価手法を整理した上で、同志社大学硬式野球部を対象とするライフスキル教育に基づいたチームビルディングプログラムの成果と課題について報告する。

**[キーワード]** 学生スポーツ選手, ライフスキル教育, プログラム開発, 大学の質保証

### I. 問題の所在

#### 1. ライフスキル教育と大学スポーツ

近年では、社会が大きく変化し、複雑化したことによって、青少年の社会への不適応や問題行動が多発し、若者の人格形成教育が問われるようになってきた。これらの問題解決のために日本をはじめ海外各国では、「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するために必要となる社会心理的能力 (WHO, 1997)」と定義されるライフスキルに着目し、全人的な教育としての取り組みが実施されるようになった (横山ほか, 2009; 吉田, 2010)。

日本では、教育の一環としてスポーツが長年にわたって採用されており、スポーツ選手には社会のロー

ルモデルとしての役割が期待されていたが、大学生を中心として数多くの不祥事が発生し社会問題となってきた (原田, 2010; アスリートのためのライフスキル研究会, 2007)。松野ほか (2009) は、日本における社会的背景やアメリカにおける実践動向を概観した上で、大学スポーツ選手を対象としたライフスキル教育の必要性を指摘し、今後、取り組むべきテーマとして「日本における取り組みの実態解明」「教育プログラムの開発と実践」「評価法の開発」など6つの課題を挙げた<sup>1</sup>。

横山ほか (2009) は、日本におけるライフスキル教育の実態解明に取り組み、教育界やスポーツ界で実施されているライフスキル教育を整理し、教育プログラムとして明示的に実践されている事例だけでなく、

1 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 (Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute of Technology)

2 同志社大学ライフリスク研究センター (Life Risk Research Center, Doshisha University)

3 同志社大学スポーツ健康科学部 (Faculty of Health and Sports Science, Doshisha University)

チームなどの組織の中で日常的に行うミーティングなど、伝統的に実践している取り組みの中にもライフスキル教育のプログラムに相当するものが存在することを指摘した。また、ライフスキル指導の実践としては、大学の体育会運動部において、不祥事からチームを立て直す際にライフスキル教育に着目して、チームとして競技力向上を目指しつつ、日常的な取り組みとしてライフスキル教育を実施した事例が報告されている（松野ほか、2010）。

このように、松野ほか（2009）が指摘した6つの課題に対して、取り組み事例の整理、およびプログラムの開発と実践といった形での着実な成果が上げられており、今後はライフスキル教育実践の評価システムの確立などの課題に取り組むことが求められる。そこで、本研究では、ライフスキル教育の評価を研究の対象として、特に、大学スポーツ選手に対するチームとして行うライフスキル教育の評価システムを主題とする。

## 2. ライフスキル教育とその評価

大学スポーツ選手を対象としたライフスキル教育の体系化はまだ着手されたところであり、現時点では、必ずしも確立したプログラムや評価法が存在しているわけではない。ライフスキル教育の評価システムを確立することは、ライフスキル教育を経験や思いつきによる教育方法や教育プログラムでなく、科学的な根拠に基づいたものにするために必要不可欠であり、ライフスキル教育を進めるにおいては理論的にも実践的にも重要となる。この評価システムを確立するためには、取り組むべき、次の2つの課題が存在する。

1つめは、大学の質保証と課外活動の関係を明らかにすることである。大学の体育会運動部の活動は大学の課外活動の一環として位置づけられており、近年、課外活動と正課教育を含めた大学全体としての教育の質保証が社会から求められるようになってきた。したがって、課外活動である体育会運動部におけるライフスキル教育の評価システムを考える際には、大学の質保証にかかわる社会的背景や動向を踏まえた上で、大学の中の課外活動の位置づけを明確にし、ライフスキル教育の評価システムを構築するための課題や具体的な方策としての知見を得ることが重要となる。

2つめは、効果測定のための評価法を検討することである。ライフスキル教育では、若者の人間的な成長を促進し、より健全な行動が可能となる力を身につけさせるものである。そこでは、実践型の学習が重視され、何を学び、どのように成果が実践の中で発揮されるかといった達成度を具体的に評価する必要がある。しかし、ライフスキル教育の実践については研究が開始されたばかりであり、現在、様々な機関や専門家が独自に実践を行い、自らが作成した尺度を用いてその効果や優位性を主張している段階である。したがって、多様な尺度に関する情報を分析し、大学スポーツ選手を対象とした使用可能な尺度およびその他の評価手法を検討することは重要な課題といえる。

そこで、本研究では、日本における大学スポーツ選手を対象としたライフスキル教育の評価システムの確立に向けて、(1)大学の質保証にかかわる社会的背景や動向を踏まえた上で、大学の中の課外活動の位置づけを明確にし、ライフスキル教育の評価システムを構築する課題や具体的な方策としての知見を得ることと、(2)ライフスキル教育の効果測定の評価尺度を検討することを目的とする。

## II. 大学教育の質保証

### 1. 社会的な背景

2008年に中央教育審議会（以下、中教審）は、「学士課程教育の構築に向けて」答申（以下、学士課程答申）を発表し、日本の大学教育が社会からの信頼にこたえ、国際的通用性を持って発展するための改革の必要性和改善方策を提言した。その後、学士課程答申に基づいて、教育改革の背景や今後の展望が様々な観点から指摘されるようになった（久保、2009；金子、2009；濱名、2009；荻上、2009；前田、2009）。ここでは、学士課程答申や上記の報告に依拠して、大学教育の質保証に至る社会的な背景を概観する。

大学教育に対する社会からの要求は、大学のユニバーサル化や社会のグローバル化、若者の価値観の変化といった社会的経済的な変化によって強まってきたとされる。入学者や大学教育の拡大といったユニバーサル化によって、入学段階での学力による選抜が一定の学力の保証としての実効性を持たなくなり、同時に、入試による選抜機能の低下が中等教育機関段階での学習に対する動機づけを低下させた。日本では、大学での学習に対する拘束性が伝統的に弱いという背景があり、教育する側と教育を受ける側のギャップが大きくなるという課題が発生した。その結果、大学が何を目標しているかだけでなく、実際に大学が学生に何を与えているのかという大学教育の実効性が求められるよ

<sup>1</sup> 6つの課題とは、①日本で実践されているライフスキル教育の実態の解明、②多様な現場の知見を集積することによるライフスキルの概念および教育プログラムの体系化、③社会に対するロールモデルとして影響力を持つスポーツ選手の育成プログラムの開発、④スポーツ選手を対象としたライフスキル教育プログラムの実践、⑤ライフスキル教育実践の評価法の確立、⑥スパイラル的な効果を獲得するための地域におけるライフスキル教育の拠点づくり、である。

うになった。

また、グローバル化とそれに伴う経済競争の激化によって発生したグローバルな知識基盤社会では、知識の獲得だけでなく、知識の活用が重視されるようになった。また、グローバル化が進展する中で労働力が流動化し、個人の学習や訓練の履歴、知識や能力を証明するシステムが求められるようになった。その結果、知識や能力の証明である学位の透明性や同等性が国際的な社会から要請されるようになった。さらに、企業の採用・人事面で、産業界から大学に対して職業人としての基礎能力の育成を求められるようになり、大学が身につけさせようとしている能力と企業が欲する能力の乖離が出てきた。このような結果、大学教育と職業能力との関係が問われるようになり、大学教育の適切性、すなわち、学生がどのような力を身につけたかが問われるようになった。

このような社会的、経済的な背景から、大学教育に対する「実質化」および「適切化」が要求されるようになった。また、大学教育への支出をマクロ経済的な観点で将来の経済成長への投資と捉えるならば、投資の効率性、すなわち、会計的および社会的説明責任を果たすよう社会から求められるようになった。以上のように、大学教育には、実質化、適切化、説明責任が求められ、これらに共通するものは、大学教育における質の向上および質の保証であるといえる。

## 2. 機関としての質保証

大学の質保証には、機関としての質保証と教育プログラムとしての質保証の2つの側面がある(荻上, 2009; 久保, 2009)。まず、機関としての質保証については、1991年の大学設置基準大綱化によって大学設置の規制が緩和され、機能別の分化と大学間の競争を促進することによって大学の質を高める試みがなされた。すなわち、市場化による競争が大学の質を向上させるという考え方であり、これに基づき各大学では、自己点検・評価が努力義務となり、1999年には義務化されるのである。これは、大学の自主的な努力によって教育の質を向上させ、その改善度合いを自己点検という形で評価し、大学教育の質を保証する取り組みである。

1998年に発表された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」では、自己点検・評価をより一層充実させることと同時にその限界も指摘され、第三者評価の必要性が提言された。2002年の中教審答申「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について」に基づき、2003年には、学校教育法が改正され、認証評価機関による認証評価が開始された。この改正は、

「事前規制から事後チェックへ」との考え方により、結果的に事前規制による保証機能は低下し、現在では、設置計画の履行状況調査や、大学評価・学位授与機構や大学基準協会といった認証評価機関による定期的な第三者評価によって質を保証する取り組みが中心となりつつある。

認証評価とは、認証評価機関が定める大学評価基準を満たしているか否かを評価するものであり、2009年の中教審質保証システム部会資料「大学の質保証システムの現状と課題」の中では、(1)国が定める最低基準としての大学設置基準、(2)最低基準を担保するための事前審査としての設置認可、(3)設置後の事後審査として国が認定した認証評価機関による認証評価(認証評価機関が定める大学評価基準)が大学の質保証を行う3本柱とされている。

## 3. 教育プログラムとしての質の保証

大学評価基準の内容に関しては、2005年に中教審大学分科会から「我が国の高等教育の将来像」と「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」の答申が発表され、教育プログラムとしての質を保証するために、入学者選抜の改善、教育課程の改善、出口管理の強化などの方針が明確に示された。この流れは、2007年の大学設置基準の改正につながり、人材養成に関する目的や教育研究上の目的を学則に定め、公表することが義務づけられることになった。

2008年7月には、「教育基本施行計画」が閣議決定され、社会の信頼にこたえる学士課程教育等を実現することという方向性が示された。2008年12月に学士課程答申が発表され、各大学は、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成、実施の方針(カリキュラム・ポリシー)、入学者選考の方針(アドミッション・ポリシー)の3つの方針を明確にし、教育上の目的をはっきりさせた上でシラバスやカリキュラムによって教育プログラムの質を保証するよう指摘された。

また、2010年7月には、日本学術会議が「大学教育の分野別質保証の在り方について」の答申を行った。この答申では、(1)教育課程の体系化、(2)単位制度の実質化、(3)教育方法の改善、(4)成績評価の4点が指摘されている。これらの取り組みの共通点は、教育プログラムとしての妥当性、計画性、整合性を保証することによる大学教育の質の保証である。すなわち、事前に教育プログラムとしての質を保証するための基準を設定し、その基準を満たしているか否かを評価するシステムであり、直接的な教育効果のみを評価対象としているものではないのである。

このような状況の中で、一方では、アウトカム（成果）志向と呼ばれる動きが顕在化したと指摘される（金子，2009）。これは、大学教育の成果として学生にどのような知識やスキルが与えられたかに着目して、大学教育のシステムを構築しようとするものである。このアウトカム志向の考え方に基づいて、学習成果達成度テストといった学力テストの開発が見られたが、そこには、テストの内容に対する適切性・妥当性の問題や実施の可能性・信頼性の問題など、課題も多く指摘されている。

#### 4. 課外活動の位置づけと動向

アメリカの大学では、一般教育、主専攻・副専攻、自由選択、教科外活動が学士課程の典型的な4要素とされ、体育会スポーツ活動やサークル活動、その他の課外活動も大学教育の一部として捉えられている（沖，2009）。正課外活動の位置づけに関して、日本では、大学設置基準において、厚生補導に関する施設としての課外活動施設（第36条5項）および学生の厚生補導を行うための組織（第42条）を設置することが規定されている。大学評価・学位授与機構の大学評価基準（機関別認証評価）によると、課外活動とは、幅広い知識と豊かな人間性を涵養するために、授業以外に大学生活全般を通じて学生が学ぶことのできるような活動とされており、部活動、サークル活動、自治会活動や自主的な学生の研究会などがこれに相当する。

課外活動の位置づけに関する動向としては、1958年の学徒厚生審議会答申において、正課教育と並ぶものとして、「学生生活の環境的条件を調整するとともに、学習体験の具体的な場面に即して、各学生の主体的条件に働きかける教育指導を行うことによって、その人格の形成を総合的に援助する」とその重要性が指摘された。ところが、2000年に発表された文部省の研究会による報告<sup>2</sup>によると、1958年の答申以降、正課外活動に対する取り組みは40年間にわたって遅れた状態であり、積極的に捉え直す必要性が指摘された。具体的には、(1) 学生相談、(2) 就職指導、(3) 修学指導、(4) 自主的活動の4点に対して、大学教員に対する正課外活動に関する研修の不足や学生指導の在り方などの提言や発言を行うことのできる専門性を備えた事務職員の必要性を指摘した上で、教員、職員、学生といった人的資源を活用し、教員中心の大学から学生を中心にした大学へ転換するよう求められたのである。

大学の競技スポーツは自主的活動の1つとして捉え

られ、学生の自主的活動は「人間の成長を促すための活動」とされ、積極的な支援や大学としての適切な評価、優秀者に対する表彰制度や報奨制度などの必要性も指摘されている。大学評価・学位授与機構の機関別認証大学評価基準の中では、基準7の学生支援の中で「7-2:学生の自主的学習を支援する環境が整備され、機能していること。また、学生の活動に対する支援が適切に行われていること」とされる<sup>3</sup>。機関別認証大学評価基準は、11の必須基準と2つの選択的評価事項から構成され、正課教育に関する基準は、基準2「教育研究組織（実施体制）」、基準3「教員及び教育支援者」、基準4「学生の受入」、基準5「教育内容及び方法」、基準6「教育の成果」、基準9「教育の質の向上及び改善のためのシステム」であるのに対して、課外教育に関する評価基準は基準7「学生支援」のみであり、その中でも課外活動としての体育会運動部に対する評価項目は、9つある基本的な観点のうちわずか2つの観点でしかない現状である。

### Ⅲ. ライフスキル教育の評価システム

#### 1. 評価の目的

真山（2009）によると、大学スポーツ選手を対象としたライフスキル教育の評価の目的には、第一次から第三次的評価までの3つのレベルがあるとされる。第一次の評価の目的は、大学スポーツ選手に対する教育効果を計測することである。これは、ライフスキルに関する知識や態度などの習得状況を明らかにするものであり、個人の到達度や達成度を評価する。第二次の評価の目的は、ライフスキル教育のプログラムとしての評価である。これは、教育プログラムの内容や方法を評価するものであり、教育方法やプログラムを確立するためには重要である。そして、第三次的評価とは、教育機関やその意思決定に関わる権限を持つものや教育に資金援助をするものたちの支援を得るために、さらには広く地域社会の支援を得るために行われるものである。社会的にアピールを行い、あるいは説明責任を果たすための評価である。

#### 2. 評価の尺度

第一次の評価として、個人に対する評価を実施する手法には、質問紙を用いた心理尺度法が用いられることが多い。ライフスキルは日常生活における心理的、社会的な問題に対処するための諸スキルの総称であ

<sup>2</sup> 文部省高等教育局「大学における学生生活の充実に関する調査研究会」による報告書「大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」

<sup>3</sup> 基本的な観点として、「①自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか」「②学生のサークル活動や自治活動等の課外活動が円滑に行われる要支援が適切に行われているか」の2点が挙げられている。

り、多くの個別スキルから構成されている<sup>4</sup>。前述したように、現時点では、ライフスキル教育の研究および実践は様々な機関や研究者によって行われている段階であるため、それぞれの実践による独自性や効果の優位性が主張される傾向にある。そこで、ここでは、大学スポーツ選手を対象とした第一次の評価が可能な心理尺度を検討するために、これまでに作成された心理的スキルや社会的スキルを含むライフスキルの測定尺度に関して研究の動向について概観する。

まず、Goldstein et al. (1980) は、青年に必要な社会的スキルとして 50 のスキルを挙げる。この 50 のスキルは初歩的スキル、高度のスキル、情報処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを対処するスキル、計画のスキルの 6 つのカテゴリーに分類される。菊地ほか (1994) は、Goldstein のスキルに 50 のスキルを追加して、合計 100 のスキルを挙げ、援助のスキル、異性とつきあうスキル、年上や年下とつきあうスキル、集団行動のスキル、異文化接触のスキルといったカテゴリーを追加している。また、菊地 (1998) は Goldstein の 6 つカテゴリーに基づき、18 項目から構成される KiSS-18 (Kikuchi's Social Skill 尺度) とよばれる社会的スキル尺度も作成している。

Darden et al. (1996) は、青年を対象とした LSDS-B (Life Skills Development Scale Adolescent Form) を作成した。この尺度は、「対人コミュニケーション・人間関係スキル」、「問題解決・意思決定スキル」、「身体的フィットネス・健康維持スキル」、「アイデンティティ発達・人生の目的スキル」の 4 つのライフスキルの尺度から構成され、質問は 65 項目であった。

上野ほか (1998) は、高校生を対象とした尺度を作成し、スポーツ場面において獲得された心理社会的スキルと日常生活におけるライフスキルの両者に着目し、それぞれ下位尺度として個人的スキルと対人スキルを挙げている。Murakami et al. (2004) は、青少年の身体的、心理的、社会的健康を高めるための健康生活スキルを評価する健康生活スキル評価尺度を作成した。ここでは、身体的尺度、心理的尺度、社会的尺度の 3 つのカテゴリーから、身体活動スキル、体調維持スキル、目標遂行スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキル、集団行動スキルの 6 因子に分類され、それぞれ 4 項目の合計 24 項目から構成されている。島本ほか (2006) は、大学生を対象とした研究に基づき、主に個人的な場面で発揮されるスキルである個人的スキルと、主に対人関係場面で発揮されるスキルである

対人スキルに分類した。その上で、個人的スキルには、計画的、情報要約力、自尊心、前向きな思考の 4 項目、対人スキルには、親和性、リーダーシップ、感受性、対人マナーの 4 項目を挙げ、合計 24 の質問項目から構成される尺度を作成している。

以上のように、現時点では、研究者によって様々な心理尺度が作成されている。したがって、ライフスキル教育の評価システムを検討する際には、評価者が誰であるかという視点が特に重要となる。心理尺度を用いた評価は、スポーツ選手個人による自己評価が中心となる場合が多い。しかし、ライフスキル教育の評価においては、ライフスキルが実際の日常場面で発揮されてこそ意味があるといえることから、学生の自己評価のみならず、日常場面で実践できているか、日常生活態度の変化や行動の変化につながっているかという、チームメイトや保護者などによる他者評価も必要となるのである。また、尺度は達成目標によって相違することから、適切な評価を行うためには、取り組みの開始段階で明確な目標を持って教育プログラムを実施することも必要である。

### 3. カーク・パトリックの 4 段階モデル

第二次的評価としてのプログラム評価に関しては、アメリカでは、企業における研修に対する評価および効果測定として、カーク・パトリックの 4 段階評価 (Kirkpatrick, 1975) と呼ばれる考え方が一般的である。このモデルでは、研修の評価を反応、学習、行動、結果の 4 つのレベルに分けて考えている。

第 1 段階は、「反応レベル」と呼ばれ、研修直後にアンケートなどを用いて研修の感想を聞くことによって満足度を評価するものである。第 2 段階は、「学習レベル」と呼ばれ、研修の中で提供された内容をどれだけ理解し、習得したかの理解度を評価するものである。第 3 段階は、「行動レベル」であり、研修を受けた者の行動の変容を評価するものである。研修で学んだ行動や役割が実際に実践できているか、またその程度を評価する。第 4 段階は、「結果レベル」であり、研修を受けた者の行動の変化が、組織に対してどのような成果を達成させたか、またその程度を評価するものである。

近年、カーク・パトリックの 4 段階評価に対して、さらに上の第 5 段階のレベルの評価も提案されている。Phillip (1991, 1997) は、研修の効果測定は、その効果を収益に換算し、収益を教育研修への投資額と比較することによってはじめて有意義になると考え、投資収益率の考え方と手法を研修の効果測定に応用した。また、Kaufmann et al. (1994) は、社会的影響を第 5 段階として加えている。

<sup>4</sup> ①自己認識、②共感性、③効果的コミュニケーション、④対人関係スキル、⑤意思決定スキル、⑥問題解決スキル、⑦創造的思考、⑧批判的思考、⑨感情対処、⑩ストレス対処から構成される (WHO, 1997)。

企業研修の効果測定について調査したアメリカの National HRD Executive Survey (1998) によると、日本では、全体の 77% は第 1 段階の反応レベルの評価を実施しているものの、第 3 段階の行動レベルで評価を実施しているのは 12% 程度であり、第 4 段階の成果レベルに至ってはわずか 6% しか実施されていないとのことである。この背景には、第 1 段階の反応レベルの評価については、汎用的に使用できる調査項目が考えられるのに対して、第 3 段階および第 4 段階の評価は研修の内容に応じた調査を実施する必要がある。効果測定のための基準の作成や第三者による観察評価などを実施する作業的な負担の存在が指摘されている。また、第 2 段階までの評価については、研修終了後すぐに実施することができるものの、第 3 段階以降の効果測定は、通常、研修終了後 3 ヶ月から半年後に実施される必要があるため、継続的に実施することが困難であるとも指摘されている。

これらのことから、スポーツ選手に対するライフスキル教育の評価システムを検討する際には、評価のタイミングが重要な視点となる。特に、大学体育会の運動部において日常的な取り組みとして実施している場合には、教育の効果が即時的にあらわれるものもあれば、中長期的に見なければ効果が出ない場合もある。ライフスキル教育は、自分自身の成長に必要な知識を得るだけでなく、技術や態度といったスキルとして身につけるかどうかの問題となることが多い。したがって、短期的な視

点で教育の効果を評価するだけでなく、長期的に定着していくことを評価することも重要といえる。

## IV. 硬式野球部の取り組み

### 1. 背景および取り組みの目的と目標

2008 年 4 月、同志社大学硬式野球部（以下、野球部）において練習中にある不祥事が発生し、再発防止策として、学生に対する教育、指導体制の改善、寮生活の指導の観点から様々な取り組みが実施された。その一環として、不祥事に対する治療のおよび予防的取り組みだけでなく、チームとしてのプレゼンス向上を目的として、野球部の部長が中心となり、教育的介入の視点に立ち、ライフスキル教育の観点に基づいたチームビルディングに取り組んだ。

2009 年度から 2010 年度にかけての目標および計画は表 1 に示した内容であり、「運営組織・運営体制の構築」、「規約の制定」、「具体的取り組みの実施」の 3 項目から構成されており、具体的な取り組みとしては、リクルート、競技力向上など 7 つの観点で整理されている。短期目標とは 1 年以内の達成をめざすものであり、中長期目標は 2～3 年以内の達成をめざすものである。松野ほか (2010) によって 2009 年度の取り組みが報告されており、本稿では、2010 年度の取り組みの中で特徴的なものを抽出し、評価システムを考える。

表 1 2009～2010 年度の目標・計画

#### 1. 運営組織・運営体制の構築

##### 【短期目標】

- ・戦略会議を設置する。
- ・学生中心のミーティングを実施する。
- ・各ブロックを配置し、ブロック会議を実施し、実質的に機能させる。

#### 2. 規約の制定

##### 【短期目標】

- ・野球部憲章を作成する。
- ・行動指針を作成する。

#### 3. 具体的取り組みの実施

##### (1) リクルート

##### 【短期目標】

- ・各学部のスポーツ関係の推薦入試を掌握するため一覧表を作成
- ・推薦入試受験の前後に担当者は父母と面談。上記硬式野球部の目標、目標達成のための行動指針ならびに補足を説明。

## (2) 競技力向上

## 【短期目標】

- ・ 継続性のある指導部体制の確立（若手OBの協力）
- ・ 野球場での練習時間の確保
  - 7:00～9:00：朝練（メイン練習に参加できずかつ1講時の無い部員は必須）
  - 13:30～17:30：メイン練習
  - 17:30～20:00：補助練習
- ・ 重要試合以外での居残り練習
- ・ 今出川での練習の検討（継志館での水泳、ジムトレーニング、御所等でのランニング）
- ・ 早期引退（3年秋シーズン終了後、4年春シーズン終了後）制度の導入と引退学生の野球部での位置づけの明確化
- ・ 機器備品の購入と活用：パソコン、スピードガン、ビデオカメラ、テレビモニター等を購入し、選手の技量を視覚化し、バイオメカニクス、運動生理学、スポーツ心理学等の科学的手法も駆使して競技力の向上を図る。
- ・ 部内マッチの導入による競争の促進
- ・ メンバー以外の選手による他大学との練習試合の導入（メンバー以外のモチベーション向上）
- ・ 朝食摂取の徹底
- ・ OBプロ野球関係者による指導
- ・ 社会人チームへの出稽古

## 【中長期目標】

- ・ 新人のトライアル
- ・ ハワイ大学等外国の大学との連携

## (3) 学生支援

## 【短期目標】

- ・ 個人別学生カルテ（人生目標・競技目標）の作成
- ・ 登録科目の相談
- ・ 登録単位、修得単位・修得科目の把握

## 【中長期目標】

- ・ チューター制度の導入
- ・ 野球部独自の奨学金制度や寄付金制度の導入
- ・ ハワイ大学等外国の大学との連携
- ・ 企業との連携（用具やサプリメントの受給）
- ・ 寮システムの改革：メンバーとそれ以外で寮を分け、競争意識をあおる。
- ・ 2013年度文系今出川統合移転への対応：80%程度の部員が、文・社会・法・経済・商・政策学部に在籍している。クラブ独自の対応策の検討に入るとともに、教務上の配慮、練習環境の整備、2校地間の移動等をスポーツ支援課を通して大学に働きかける。

## (4) モラル向上

## 【短期目標】

- ・ 同志社大学硬式野球部憲章の実体化
- ・ ルール違反者に対するペナルティーの手続きを確立
- ・ モラルの向上を図るための講習会を開催
- ・ 寮規則の完成と徹底

## (5) 財務・広報・庶務・渉外

## 【短期目標】

- ・ 複式簿記による予・決算書表の作成と経理規程の確立、会計監査の実行
- ・ 少年野球の指導等、地域との連携推進（「京たなべ・同志社スポーツクラブ」への加入）
- ・ 3高校対抗戦の活性化
- ・ 執行部、学生、OB会の連携強化

## 【中長期目標】

- ・ ホームページの更新と協賛企業の開拓

- ・企業との連携（用具やサプリメントの受給）
- ・学内3高校への派遣コーチ制度の導入（英語講師等の学業面での連携も推進）
- ・野球部独自の奨学金制度や寄付金制度の導入

#### （6）施設設備

- ・スポーツ支援課と交渉し、施設設備の整備

##### 【短期目標】

- ・ビジター選手用の着替え場所の整備（パーフェクトハウスの活用）

##### 【中長期目標】

- ・外野フェンスのクッション化、屋内練習場の新設等

#### （7）就職

##### 【中長期目標】

- ・プロ野球、社会人野球志望者と一般就職志望者に分けて支援
- ・就職ネットワークの構築

## 2. 学生ミーティング

2009年度に引き続き、学生ミーティングを実施した。ミーティングは、野球部に関わること全般が議論され、議論を通してチームの課題を抽出し、その課題を解決する方策を検討するものであった。そこでは、宿題という形で学生らに取り組みべき課題を与え、次のミーティングにおいて、取り組んだ結果を作成した資料に基づいて発表し、さらに議論を深めていく形式をとった。ミーティングの開催日は、表2に示した通りである。当初、ミーティングの進行は監督がつとめたが、2010年8月以降の進行は主将が担当した。

表3～6にミーティングの議事録を掲載した。この議事録は、マネージャーが作成して関係者に配布されたものの一部である。議論の内容が記録として残る

表2 ライフスキルミーティング

No.	2009年度		2010年度	
	日時	場所	日時	場所
1	2008/11/22	今出川	2009/11/12	今出川
2	2008/12/23	今出川	2009/12/17	今出川
3	2009/01/10	京田辺	2010/01/21	今出川
4	2009/01/17	京田辺	2010/03/04	京田辺
5	2009/01/23	京田辺	2010/03/31	今出川
6	2009/02/14	京田辺	2010/04/16	今出川
7	2009/03/01	京田辺	2010/05/12	京田辺
8	2009/03/23	京田辺	2010/06/02	京田辺
9	2009/04/07	京田辺	2010/06/23	京田辺
10	2009/05/07	京田辺	2010/07/14	今出川
11	2009/06/04	京田辺	2010/08/17	キャンパスプラザ
12	2009/06/18	京田辺	2010/09/02	京田辺
13	2009/07/16	京田辺	2010/10/07	京田辺
14	2009/09/11	京田辺	2010/10/28	京田辺
15	2009/10/07	京田辺		

表3 ミーティング議事録（第2回：2009年12月17日）

#### 第2回ミーティング議事録

日時：12月17日 18：45～20：00

場所：今出川キャンパス寒梅館6-A会議室

出席者：部長、副部長、監督、OB会長、選手8名、学生コーチ1名、マネージャー3名、アドバイザーボード3名

#### 1. 新チームの目標についてのアンケート統計結果報告（主将より）

#### 2. 前回の課題：各ポジションの強み・弱み・課題を具体化 について（各責任者より）

【チーム全体】①強み：経験者が残っている。昨シーズン、下級生が意識を持って試合に取り組んでくれた。②弱み：練習において手を抜いている傾向がある③課題：個人それぞれが変わっていく（意識の高さの統一等）

【投手】①強み：昨シーズンのメンバーが全員残っている。今まで成長してきた分、そのまま続けて成長していくことが可能。②弱み：自滅する傾向がある（四死球等）。③課題：防御率を下げる（チェック項目に投げ込み・走り込みは確定！）

【捕手】①強み：肩が強い選手が多い。②弱み：送球が安定しない。足が使えていない。③課題：送球の安定（キャッチボールの徹底、基本練習）、コントロール、投手が低めを信頼して投げられるような雰囲気作り、投手とのコミュニケーション（お互いに評価し合う）



【B チーム】②弱み：A と B との温度差。練習時のだらけやすい。③課題：全体練習を減らし、自主練習の時間を増やし、個々の意識を高める。あとは、練習後のミーティングでいろいろな意見を聞き考えていく。

【学生コーチ】③課題：積極的な練習参加を实践。各自のノックの正確さを上げ、守備力の向上につなげる。献身的な姿勢でチームの勝利に貢献する。

【寮】規則及び細則：資料参照 については、来年度からしっかり徹底する。チェックリストの説明：資料参照。できていない点：掃除…1 回生が担当場所を当番制でしているが、責任をもってしっかりやっていくように指導する。門限…ホームステイ田中同様点呼の実施。問題点：下宿生への対応。解決策：寮則とチェックリストを寮生内で共有し、みんなが責任を持ち注意しあえるようにする。

【トレーナー】①強み（改善されてきた点）：練習後のランニング。上回生がしっかり取り組むことによって下回生へ良い影響を与えるように。②弱み（気になる点）：初めのアップ（ストレッチ・フットワーク）の意識が低い。怪我の心配・練習の雰囲気悪化。ラン後の体幹トレーニングの手抜きが1・2 回生に目立つ。風邪・熱での欠席や睡眠不足の練習参加。③課題：睡眠不足や食生活の改善の呼び掛け、体調管理の徹底。練習に関しては選手間で完全していくべき

【マネージャー】②弱み（気になる点）：全体練習の参加率が悪い。③課題：時間割提出の際の練習参加表のシステム化。練習欠席の連絡の徹底。欠席連絡は練習開始○前と決め、監督・主将・主務・トレーナー全員が共有。

### 3. チェックリスト作成にあたって（アドバイザーボードより）

【アドバイザーボード A】問題点は、各パート間のコミュニケーション不足。スタッフと選手との立場関係はどうなっているか。各パート間のコミュニケーション不足解消方法は？フィードバックシステムは？チェックリスト＝スローガン のようになってしまわないように！「実現可能、具体化、数値化」「ないものでなく、あるものを活かしていく」がポイント

【アドバイザーボード B】①紙資料を残す：同じ×を繰り返さない。思いを共有する。次へ進む。②分析→目標→☆評価：PDCA サイクルにおいても評価がないと改善できない！③評価は○×で…：あいまいさをなくす（△で評価できる目標はなし）。すぐに自己・他者評価→今は、選手が自己評価、スタッフが他者評価…これをなくし、自己・他者評価を互いに共有する。その役目が“学生コーチ”“当事者”として何をすべきか？

【アドバイザーボード A】規則・チェックリストは当たり前！という部になることが目標。無理矢理チェックリストを作成し、こなしていくのでは意味がない。まずは「基本」から…

【アドバイザーボード B】周知、決定、順守の3つが大切。周知：守るためには知らせなければならない。決定：目標を決定したら守らなければならない。順守：2つがあって、初めて守る。

### 4. 予算案について

- ・部車購入について
- ・選手から要望があったものについて
- ・同立戦ポスター作成について
- ・とんぼ購入について
- ・寮のネット環境整備について

### 5. まとめ

- ・アンケートの管理方法：個人カルテ作成（ファイル）
- ・目標設定シート：一度、プロジェクトメンバー内でシュミレーションして改善する
- ・寮対策：下宿生への対応（ルール化する）。チェック項目 14 について（近隣の住民とコミュニケーションをとる。Ex) 直接聞きまわる。など…）規則について（守れるように変えていく。）
- ・B チーム課題（監督→大家）：A・B チーム間の温度差を分析

### 【次回までの課題・宿題】

- ・チェックリストの作成：具体化・実現化、○×で評価できる項目で作成する。
- ・目標シートのフォーマット
- ・各パートの相互コミュニケーションの方法について考える。他者評価・自己評価の行き来の方法論

表4 ミーティング議事録 (第11回: 2010年8月17日)

<p>第11回ミーティング議事録                  日時: 8月17日 13:00 ~ 14:30                  場所: コンソーシアム京都 会議室 203                  出席者: 部長, 副部長, 監督, 選手11名, 学生トレーナー1名, マネージャー2名, アドバイザリーボード3名</p> <p>1. ポジション別目標設定シートの修正について                  各責任者より説明があった。  <b>【投手】</b> 投げ込みの意味とは… 個人で役割 (バッティングPなど) を決める. 球数を決める.  <b>【捕手】</b> OP戦で課題を持って, 投手と話し合うことを怠らずに. 捕手は予習・復習が大事である.  <b>【内野手】</b> シートの原因 (メンタル) を “基本がなってない” → “相手の胸へ投げる, 握り替えが素早くできない” に変更. シートの成功の分析 (スキル) を “積極的な守備ができた” → “一歩前に出て捕る” に変更. 具体化させて浸透させたい.  <b>【打撃】</b> 特に変更なし  <b>【寮】</b> 具体化できるのが時間だけ  <b>【監督】</b> フリーバッティングのピッチャーを1回生だけでなく全員で行う. ルーティン行動として取り入れる  <b>【副部長】</b> ポジション別のシートでは, 具体化できるものとできないものがある. 個人のシートではポジション別のシートを生かすことでもっと具体化できるだろう.  <b>【アドバイザリーボード】</b> 積み重ねることが大事なのに前と同じだと集まって話し合う意味がない. 3回生が今のもの+αできるのか…</p> <p>2. その他                  ・栄養管理について                  ・AED講習会について                  ・TV, その他必要なものについて                  ・京田辺まつりについて                  ・強化指定クラブのお金の使い方について                  ・春上がりした4回生について</p> <p><b>【次回までの課題・宿題】</b>                  ・個人の目標設定シートを完成させる→浸透.                  ・観戦記の原案を提出する</p>
--

表5 ミーティング議事録 (第13回: 2010年10月7日)

<p>第13回ミーティング議事録                  日時: 10月7日 19:00 ~ 20:00                  場所: 京田辺キャンパス体育ハウス1 ミーティングルーム                  出席者: 部長, 副部長2名, 監督, 監督補佐, 選手14名, トレーナー1名, マネージャー4名, アドバイザリーボード3名</p> <p>1. 観戦ノートについて                  各責任者より, 観戦ノートの活用・成果・感じたことについて報告があった。  <b>【投手】</b> 四球のこわさについて, 試合に出ているメンバーが今以上に意識しなければいけないと感じた。  <b>【捕手】</b> プレーに対して, 自分とは異なる考え方を知ることが出来て, 今後のプレーに参考にすべきだと感じた。  <b>【外野】</b> 送球など連係プレーは特に, チームの代表としての自覚をもつことが大事だと感じた. チャンスのはずなのに何故がピンチになっている…という意見があった。  <b>【司会】</b> 自分では気づかないことが多く書かれていたと思う. 次から, その意見をどのように練習に活かすか…などを検討すべき。  <b>【監督】</b> そもそも観戦ノートは必要だと思ったか?</p>
--

【メンバー】自分一人では気づかないことが書いてあるので必要。これからも続けていくべき。

【メンバー外】全員が書く必要があるのか？という意見もある。●●大のように全員でしっかり応援の方が自然なのは、→もともと応援がだらけていたから観戦ノート始めた。→みんながどう考えているのか把握した上で、今後検討する必要がある。（応援ではなく練習したいという意見もあるので…）

## 2. 小グループミーティングについて

各責任者より、小グループミーティングの成果について報告があった。

【投手】B：Aでシートバッティングの時に投げたい。バッティング投手ピを1回生だけで回すのではなく全員で回すべき。以上の2つについて今後検討していく。

【捕手】AB別にミーティングを行った。【A】不満なし、練習・チーム・Bに対して特に何も意見はでなかった。【B】不満として休む人が多い、練習にめりはりが少ない（2・3分の短い休憩などが必要？）。ノック中のやる気のないプレーが目立つ。キャッチボールの時間が短い。就職活動戻りの部内での位置づけが分からない（環境作り…）。→監督から4回生へ…体験談から解決方法を提案してほしい。

【内野】Aの危機感のなさを感じた。→AB間での入れ替えをもっと激しくするべき。リーグ戦観戦に対して…できれば残って練習したい。→昨年、居残り練習を実施して成果がなかった。もう少し考える。練習を見て技術面を指導する“コーチ”という存在が必要…

【外野】練習メニューの見直し（キャッチボールの時間を増やす…）。外野の中で、複数の守備練習をしたい→個人のパフォーマンス向上は大歓迎、外野内で話し合いを設ける（監督）。シートノックについて：試合前のシートノックは相手に圧を与える機会→練習から意味のある声だしを意識して取り組む

【監督】各ポジションで、小ミーティングの成果をまとめて文書にして提出。

【その他】Aチームに危機感がない→ダラダラしている人は外す（監督）。観戦ノートの回収・返却が分からない→次からマネージャーは通さず、直接責任者に提出・返却を行う。責任者は、観戦ノートの内容をまとめて、後日監督に提出する。

## 3. 目標設定シートについて

新チームになってからの目標設定シートのスタートはいつなのか？→今回の失敗などを活かし、できるだけ明確に決めておく（3・4回生）。

## 4. 成績・授業について

春学期単位取得については比較的優秀だったと思う。練習参加：不参加の時の自主練メニューが曖昧なままで終わっている。→再度、練習参加最終確認を行い、自主練のメニューも明確に記す。

## 5. その他

パーフェクトハウスにおいている個人目標設定シートについて。各自、監督のコメントを見てフィードバック。他の人のものも見て、他者評価も行う。ただし、持ち出しは禁止！！→土曜日の試合後ミーティングで全員に伝える。

表6 ミーティング議事録（第14回：2010年10月28日）

### 第14回ミーティング議事録

日時：10月28日（木）19：00～20：00

場所：京田辺キャンパス体育ハウス1ミーティングルーム

出席者：部長、監督、選手17名、マネージャー7名、アドバイザーボード3名

#### 1. リーグ戦全体を通しての反省

司会の指名より、9・10月のリーグ戦全体をふりかえって感じたことの報告があった。

【A】勝ち試合：ロスコア→チーム全体が粘り強くなっている。負け試合：中継ぎ（救援）が打たれる→全てにおいて準備不足（特に精神面）

【B】バントミスが目立った。→バントの練習不足が原因。粘り勝ちした試合→粘り強くなっていると感じる。送球エラー→ボールの回転…キャッチボールの徹底が必要。

- 【C】** 反対に、攻撃において、フライではなくゴロを打つように心掛ける。勝ち試合：ゴロアウトが多い。負け試合：フライアウトが多い
- 【D】** 監督の采配がチームに活かされていない場面があった。チームで徹底したことをちゃんとする。
- 【E】** 細かいプレー（バントミスなど…）を代表決定戦までに見直すべき。→練習不足から自信が持てなくてミスしてしまう。春のキャンプ以来していないのは十分に反省する点だ（監督）。自分の打順なども考えて、各自で練習に取り組むべきでは？
- 【F】** 大事な場面でのサインミス → 試合前の再確認が必要。
- 【監督】** 試合中の選手間のコミュニケーションはどうだったか？
- 【G】** 内野・外野の声の連携はちゃんとできていた。内野間でも声のでていたので投手としてもやりやすかった。守備でもお見合いなどのミスも特になかった。→ いいことなので、これから続けていく。

## 2. リーグ戦応援について

司会の指名より、リーグ戦の応援形態について意見が出された。

- 【A】** 同立戦では雨だったり寒い中、一生懸命応援してくれていたのよかった。代表決定戦も大事な試合なので同立戦のように応援して欲しいと思う。
- 【H】** 観戦ノートは試合に来させるための出欠点検？ミーティングなどで活用されるのであれば続けたほうが良いと思う。
- 【B】** 観戦ノートを見ていて、あまり内容がないので今のままでは意味がない。
- 【I】** 書いて残すことは大事だと思うが…。
- 【A】** チームで活用されていない。出欠点検に使われていると思うことがいけない。チームのためだけでなく、一番は自分のためだという意識を持たなければ…
- 【J】** まず、野球部なのに試合に来ない人の考えが分からない。あきらかにサボっているように感じる。●●大学は結果5位だったが、メンバーとスタンドの一体感からリーグ内で一番力があると感じた。
- 【司会】** とりあえず、11月1日からの代表決定戦はどうするか？ 試合は、スタンドで全員同じ場所に固まって応援する（ベンチ裏・カメラマン席禁止）。

## 3. モチベーション維持について

秋リーグ戦では、第6節に●●大に2連敗し、一時は自力優勝がなくなり空気が重くなった。代表決定戦では1敗しても代表の望みは残っている。その時の対処法について話し合われた。

- 【司会】** 関学戦での1敗と立命戦での1敗は何が違ったか？
- 【K】** あきらかに立命戦の時のほうがチーム全体が緊迫した雰囲気だった。
- 【監督】** 関学戦はみんな気持ちが乗っていなかった。
- 【司会】** 対処法は？
- 【C】** 先を見過ぎない。関学戦では1試合ではなく2勝を見てしまっていた。代表決定戦も3連勝で考えるのではなく、1勝を着実に…
- 【A】** 余計な情報を取り入れず、まずは奈良産業大学！！「一戦一勝」をスローガンに頑張る。
- 【E】** トーナメントはリーグ戦と違って情報が少ない。1回戦が終わったら、明日の試合相手の情報を取り込むように。

ことで、情報の蓄積および確認に有効であり、決定事項などの周知徹底をはかる上で活用された。議事録を見ると、2回目のミーティング（表3）では、リーダーが各ポジションの長所、短所、課題、今後の取り組み内容などを発表してはいるものの、学生間の議論の深まりは見られず、一方的な報告・発表が中心であった。ところが、表5および表6に示した10月の学生ミーティングでは、「観戦ノートについて」や「ポジション別小グループミーティングを踏まえて」といったテーマに対する学生間での意見のやりとりが行われ、議論によって合意を形成していくプロセスが発生する

ようになった。ここには、自分の意見を人前で発表する経験を通して、意思決定スキルや対人関係スキルの獲得が促され、効果的な議論が出来るようになったことがうかがわれる。

2009年度から2010年度に移行する際には、学生ミーティングに新たに参加するメンバーがこれまでの流れを理解していないケースが見られ、全体としての意思疎通を図るまでにある程度の時間が必要となった。また、取り組みの意図や注意点などについて、最初から説明する必要があると、時間的にも労力的にもスムーズな引き継ぎが課題であった。そこで、2010

年度は、春季リーグ戦の終了後、2011年度への引き継ぎを意識してポジションごとに3回生のリーダーもミーティングに出席し、4回生のリーダーと役割を分担し、3回生にも積極的な発言を求めるスタイルをとった。このように半年間の引き継ぎ期間を設けることで、取り組みの意図や内容等の理解を進め、より精度の高いミーティングになるよう努めた。

多くの3回生の学生もミーティングに出席するようになったため、参加者が2009年度と比較して倍以上となり、全体ミーティングでの発言者が偏ったり、議論が進みにくくなったりするなどの課題も発生した。

そこで、学生ミーティングを実施する直前に、部長、副部長、監督、主将、主務、アドバイザーボードによる事前打ち合わせを実施した。事前打ち合わせでは、学生ミーティングで議論する論点を整理し、内容を整理した上で学生ミーティングを実施するようにした。合意形成を目指すのか、ブレインストーミング的に議論するのかなど、一定の目標を定めて、学生ミーティングを開催することにした。このことによって、学生間の活発な議論が行われつつもスムーズな進行が達成された。

表7 ポジション別目標設定シート

ポジション	内野	記入日 (やると決めた日) 2月13日	目標達成日 6月中旬		
	チーム				
達成目標	最高の目標	リーグ戦失策ゼロ個			
	中間の目標	送球の失策ゼロ			
	絶対出来る目標	積極的な守備をする			
	今回の目標	送球の失策ゼロ			
経過目標	OP戦開始まで キャンプで実践練習を中心に実践になれる。プレッシャー・緊張感のある中で守備練習をこなしていく	→	リーグ戦開幕まで OP戦で、より実践に近い形で試合になれていく。その中で出た課題を練習で1つ1つつぶしていく。エラーを恐れない積極的なプレーを心がける	→	リーグ戦中 積極的かつ確実なプレーをする。エラーをしても引きずらず、切り替える。守備から攻撃へリズムを作れるように！ 目指せ無失策！
	成功の分析		失敗の分析		
メンタル	①自信を持ってプレーができた ②いつでも飛んでこいと思いがら守れた ③ランナーが出てもびびらず守れた ④周りに声をかけるなど余裕を持って守れた		①プレーに対して自信が持てなかった ②飛んでくるなと思いがら守ってしまった ③ランナーが出てプレッシャーを感じびびってしまった ④周りに声をかける余裕がないくらい緊張してしまった		
スキル	①積極的な守備が出来た ②送球ミスがなかった ③ファンブルしても慌てず処理できた		①消極的なプレーになってしまった ②送球ミスをしてしまった ③ファンブルして慌てたため送球エラーにつながった		
体力	①連戦できる体力がついた ②特守などの練習を通じて体力向上できた ③ランニングを妥協することなくやり遂げる		①連戦での途中でバテた ②特守など体力向上につながる練習をしなかった ③ランニングを妥協した		
	原因		解決策		
メンタル	①普段の練習をただこなしてしまっている ②守備練習を自分の納得いくまでしなかった ③普段からランナーを意識して守っていなかった ④普段から周りに声をかけながらやっていない		①普段からもっと試合のための練習を想定してする ②リーグ戦まで自分の納得のいくまで練習をする(目標設定するといいかも) ③ランナーを想定する練習の時こそ緊張感を持つする ④普段から黙々とするのではなく、コミュニケーションをとりながらする		

スキル	①普段から後ろに下がって捕ったり、待って捕ったりしている ②守備練習を自分の納得いくまでやらなかった ③ノックの時などファンブルしたとき諦めてプレーを終わらせている	①普段から前に出て捕る練習をする ②一番の課題だからもっと個人が意識して取り組む ③ノック時など少しファンブルしても最後まで（送球まで）続けてプレーする
体力	①、③ランニングの時など自分に甘く妥協している ②特守などから逃げてやらない	①妥協している選手に対し厳しい声を掛け合う ②自分から積極的に行動する。待っていても何も始まらない
解決策の問題点		
メンタル	①～④までまずは意識の問題。何かを直そうと思うとき意識できるかどうか、鍵になる	
スキル	①～③まで意識の問題。メンタルに同じ。	
体力	①～②まで意識の問題。メンタルに同じ。	
ルーティン行動		
	キャッチボール時、捕ってからすぐ投げるなど工夫して取り組む	守備時、前に出る積極的守備をする
	シートノック時、意味のある声の掛け合いをしながら取り組む。	カットプレー時、最短で中継に入る
	シートバッティング、紅白戦時、緊張感を持って取り組む。	エラー時、プレーを切らず送球まで続ける
	シートバッティング、紅白戦時、ランナーを意識して守る	毎日、グラウンド内の石、ゴミを拾う
	守備時、相手が次の動作に移りやすいボールを投げる	毎日、感謝の意を込めて整備をする
	守備時、ローボールを意識して投げる	ミスが出たら、流さず確認し合う
	守備時、相手が取れる範囲内の送球をする	外野とも会話をしながら守る。

### 3. ポジション別目標設定

2009年度は、12月1月の冬季練習期間に、各ポジションおよびチーム全体の強みと弱みの分析をした上でポジションやチームの課題を発見し、目標とする状態を設定し、改善のための計画を立てる目標設定を実施した。この狙いは、選手に対して自ら考える力を養成するとともに、PDCAサイクルを意識的に行うことで自己有能感を高め、競技者としての心理的スキル（自信）に汎化させることも意図していた。

2010年度も、前年度と同じように、新チーム発足後の冬季練習期間中に自己分析に基づく目標設定を行った。2010年度は、表7に示したようなフォーマットを用いて、分析の視点を整理して実施した。フォーマットの作成にはアドバイザーボードのメンバーと主将と主務が打ち合わせを行い、項目を設定した。

目標として達成目標と経過目標を設定し、成功と失敗の分析によって各ポジションの現状を分析した上で、なぜ失敗するのかの原因を探り、克服するための解決策を記入できるようにした。さらに、4つのポイントについて、心理面、技術面、体力面の3側面から考えるようにした。心理面、技術面、体力面における解決策を具体的に記述することができれば、その内容を毎日継続することが目標達成に直接つながると意識しやすくなると考えた。ルーティン行動は毎日の練習

の中で意識して取り組むものであり、○×式のチェックリストとして行えるようにした。

また、新たな試みとして、解決策の問題点の項目を追加した。具体的な解決策としてすべき行動を設定できたとしても、目標が必ずしも達成されない場合もある。自分自身の力が及ばない部分、すなわち自己統制不可能な要因によって目標が達成されない場合である。このような場合は、周囲からのサポートなどが必要であり、いかにそのサポートを得るかについて戦略的に考えることも重要である。しかし、この項目の意図を徹底することができず、この点は今後の課題である。

### 4. 個人の目標設定シート作成

表8に示したものは個人の目標設定シートである。2010年度は、全選手が目標設定シートを記入した。ポジション別目標設定シートを参考にして、リーグ戦での目標を設定し、心理面、技術面、体力面、生活面の4側面から自己分析を行い、良い点と悪い点を見つめ直し、うまくいかない原因を探った上で、具体的な解決策を考え、毎日の練習や日常生活の中でルーティン行動としてチェックするものであった。実際に選手が記入する前に、学生ミーティングに参加しているリーダーが中心となって、試行を繰り返し、記入項目を精査し、何度もフォーマットを変更しながら独自

表 8 個人別目標設定シート

名前	●●●●	記入日 (やると決めた日) 8月19日	目標達成日 11月中旬
奉仕活動	家庭：私は毎日風呂場をきれいに掃除します		職場：私は毎日ブルベン整備をします。
	チーム		個人
	最高の目標	日本一！！	リーグ戦にベンチ入りして結果を出す
	中間の目標	リーグ優勝	オープン戦に登板して、結果を出す
	絶対出来る目標	各自が目標を持った意義のある練習をする	今回決めたことを毎日確実にこなしていく
	今回の目標	リーグ優勝	試合で登板すること
経過目標	9月4日 リーグ戦ベンチ入り → 10月 リーグ戦優勝・神宮出場 → 11月 新人戦ベンチ入り・登板		
	成功の分析		失敗の分析
メンタル	①余裕を持って力まず投球が出来た ②ランナーを出した後に落ち着いて投球できた ③自信を持って投げることが出来た		①気持ちが高ぶりすぎて上がってしまう ②バッターを打ち取るイメージが出来ないまま投球した。 ③自信がないまま投球した。
スキル	①フォークでいつでもストライクが取れた ②下半身でリードしたフォームで投げていた ③軸を意識してぶれずに投球動作が出来た。 ④リリースまで良い具合に脱力して持って行けた ⑤緩い変化を使って打者のタイミングを外すことが出来た		①フォークでストライクが取れない ②状態が突っ込んだまま投げていた。 ③ストライクが入らなくなると、すぐにどうにかしようとして投げ急いでしまう。 ④良いカウントになると変に力んでしまいフォームが崩れる。
健康・生活	①毎日3食摂って水分を少なめにしていた。 ②風呂上がりに毎日15分のストレッチタイムを取っていた ③授業等、すべてのことに集中して取り組んでいた。		①朝食をあまりとらなかった。 ②寝付けない日が続いた。
	原因		解決策
メンタル	①変化球でストライクが取れた ②ランナーを塁から動かせない自信があった ③投げ込み、走り込み等、練習量に自信があった		①内野手をやっていたので投手経験が少ないので、時間を有効に使ってブルベンになるべく毎日入る(マウンド)。 ②自分に自信が持てるくらいの練習をする。
スキル	①フォークなら何時でもストライクが取れるという安心感があり、そのため他の球種も思い切り腕を振ることが出来た。 ②股関節の柔軟性と強度があった。 ③身体のバランスが取れていた(体幹等) ④下半身が安定していた。 ⑤投げ込みで変化球のコントロールを意識して出来ていた		①走るときや移動の時など、ボールを常に握って行動する。 ②毎日、ピッチングをして感覚をつかむことと、夕食後には必ずシャドーピッチングをしてフォームを作っていく。 ③毎日、ダッシュとランニングで最低でも5km以上は絶対走る。腹筋背筋は300回以上する。ウエイトの日は欠かさず参加する。 ④落ち着いて投球が出来るよう、寝る前に5分間毎日瞑想する
健康・生活	①テレビをほとんど見ない。 ②集中力をつけるために日々の生活の中で意識した生活を送る		①毎日今よりも30分早く起きて少しでも身体を起こしてから朝食をしっかり捕る。 ②練る前に教科書や本を読むなどして頭を使う。
	ルーティン行動		期日目標
	私は、毎日5km以上走って、腹筋背筋を300回以上やります		8月30日：自分に足りないものを明確にする
	私は、持てるときにボールを常に握っておきます。		8月30日：練習の中で欠点を埋め、長所を伸ばす
	私は、毎日マウンドかブルベンに入ります。		8月30日：シート打撃等マウンドで投げる機会があったときには結果を残す
	私は、毎日風呂掃除を責任を持って行います		9月末日：自分の思うようなボールが投げられるようにする(変化球でストライク)

私は、身の回りの整理整頓を心がけます	9月末日：いつでも投げられる力を身につける
私は、毎日気持ちの良い挨拶をします	10月：誰からも認められるように努力し、力を身につける
私は、毎日3食しっかりととり、プロテインを飲みます	11月：新人戦でベンチ入りして完全に抑える
私は、毎日シャドーピッチングでフォームを作ります	
目標達成のための支援者	監督、コーチ、親族、先輩、チームメイト、寮のおじちゃん・おばちゃん
目標達成のための支援内容	技術指導、経済的な支援、食事、力を高め合う

フォーマットとして仕上げた。

また、この全選手の目標設定シートをファイルした上でグラウンドに置き、誰もが見られるようにした。これは、他人のシートを見ることで自分自身を相対化して自己評価することができ、自分自身に気づききっかけを作ることを目指したものである。さらには、監督やポジションリーダーが、メンバーの目標設定シートに目を通し、赤ペンでコメントを入れる作業を行った。目標設定シートを単に書いて終わるだけにせず、フィードバックを与えることで、より強い動機づけとなるようにとの配慮である。

## 5. 戦略会議およびチーム支援

表9に示したように、2010年度は4回の戦略会議が開催され、そこでは、各ブロックの活動状況が報告され、これにより進捗状況を共有し、チームの課題を洗い直して解決策が講じられた。

表9 戦略会議開催日程

No.	日時
第1回	2009年6月26日(金)
第2回	2009年8月6日(木)
第3回	2009年10月1日(木)
第4回	2009年11月19日(木)
第5回	2010年1月28日(木)
第6回	2010年7月4日(日)
第7回	2010年9月11日(土)
第8回	2010年11月20日(土)

競技力向上ブロックでは、早期引退制度を導入し、引退学生の野球部での位置づけを明確にした。また、社会人チームへの練習参加を積極的に行った。外部講師による講演会(9月11日：テーマは、「リーグ戦におけるチームのモチベーションの向上について—野球と思うな、人生と思え」)を実施し、また、栄養管理のプロジェクトの計画を開始した。

学生支援ブロックでは、単位の登録について把握し、AED講習会を実施した。モラル向上ブロックでは、寮規則を作成し、バイク使用に関する運転状況調査や

安全運転のためのルール作成を行った。また、バイクやアルバイトの届け出制の徹底をはかった。

財務・広報・庶務・渉外ブロックでは、経理規定を確立させ、複式簿記による予算書および決算書を作成し、戦略会議において予算および決算の審議を行い、財務運営の一層の透明化をはかった。このことにより、戦略的に支出する意義について強く意識できるようになった。また、学内3高校野球部部長会議を開催し、ホームページについては、企業協賛を得た。

施設設備ブロックでは、ビデオ等の道具を購入した。就職ブロックでは、OB会と連携を図りながら、就職ネットワークを構築した。その一環として、2009年12月21日には就職活動ガイダンスを実施した。

## V. 考察および今後の展望

### 1. 大学スポーツの役割と大学スポーツへの支援

大学の競技スポーツが果たす役割をまとめると、第1には、大学の正課外活動として、学生に人格的形成および人間的成長を促し、社会への有為な人材の育成が挙げられる。2つめには、競技種目によっては企業スポーツの衰退を補完する、トップレベルの競技者育成の役割も期待されていることである。3点目には、競技選手の活躍が、大学の知名度やイメージの向上にも寄与することである。4点目としては、競技上の活躍によって学生や教職員などの大学に所属する者や卒業生、地元住民との一体感を醸成する効果が期待されることである(岡本, 2004)。

近年では、競技内容が高度化したことによって、大学競技スポーツが上述した4つの役割を果たすためには、競技に対するより高度な支援が必要となってきた。医学部やスポーツ関連学部を有する大学では、医師やアスレチックトレーナーなどの学内資源を有効に利用した体制づくり<sup>5</sup>によって、教育的な支援活動が

<sup>5</sup> 東海大学スポーツ医科学研究所(有賀2005)、鹿屋体育大学スポーツトレーニング教育研究センター(西園2005)、早稲田大学スポーツ医科学クリニック(倉持2005)など。



行われている。また、それ以外の大学では、学生部や課外活動課といった大学の厚生補導部門によって競技力向上を目指した取り組みが行われている（北海道大学高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部 2010, 宇部 2006）。後者の中には、大学職員が競技スポーツの技術や戦術などの指導を積極的に行い、課外活動を正課教育の中に位置づけようとする実践も報告されている（池上, 2009）。

前述したように、大学教育は、様々な社会的背景から質の保証が求められるようになり、多様なステークホルダーに対する社会的責任が問われるようになった。その結果、大学教育では、評価という手法を用いて質の改善が行われ、その充実がはかられている。しかし、一方では、そのための評価システムには、正課教育が大部分を占め、課外活動は評価の対象の枠組みにはほとんど入っていない現状にある。また、実際に実施されている支援については、トレーニングや医学的サポートに限定されているのが現状である。アメリカでは、大学の体育局が中心となり、競技力向上だけでなく、大学での学習や就職活動、日常生活に至るまで多様な支援が実施され、日本の支援体制とは対照的である。

松繁（2005）が指摘するように、大学で行われる教育の内容と社会に出てから仕事をする上で必要とされる能力・技能との関係が真剣には分析されていなかったことを背景として、従来は、体育会運動部に所属することの利点が多いと考えられていた。しかし、社会からの要請もあって、大学教育がその教育的機能を真剣に考えるようになってきた結果、正課教育としての質を保証する流れが発生し、相対的に体育会運動部の教育効果を等閑視する可能性が存在する。

このように日本の大学スポーツは、支援環境が非常に脆弱でありながらも、人材育成、競技力向上、大学イメージの向上などといった役割を期待され、僅かであったとしても期待を背く事態が発生すると、社会や大学から大きな批判を受けるという不釣り合いな現状にあると指摘できる。

## 2. 野球部に対する取り組みに対する理論的評価

野球部の取り組みの目的は、単なる競技力の向上ではなく、日常生活や学習面を含めた総合的な学生支援であり、大学スポーツ選手を対象とした新しい支援モデル構築の試みといえる。すなわち、大学の体育会運動部への様々な期待に応えるための実践でもあり、一般社会や野球界、大学関係者などの関係者に対する説明責任を果たす取り組みであるといえる。

今回の取り組みでは、(1) 競技力を向上させる、(2) 学業を充実させる、(3) 人間的な成長をはかる、とい

う3つの目標を設定しているが、単なるスローガンとして掲げるのではなく、具体的な評価の可能な形態として実施された。例えば、競技力向上については、ポジションのリーダーがチームの分析を行った上で、目標を設定し、達成するための課題を挙げ、達成度を評価した。日常生活面においても、野球部内の規則を明確にして、客観的な評価を可能にした。また、これは、学生自身が行う取り組みだけでなく、学生を支援する職員やOB、アドバイザーボードが果たす役割についても、具体的な目標を設定し、計画を立てて、実行された。以上のように、一連の取り組みには、「見える化」という共通した特徴が見られ、意思決定や方針、目標、規則などがチーム内で徹底された。また、今回の事例は、「決定の見える化」「ルール内容の見える化」「評価の見える化」の3つの見える化に整理される。

スポーツでは、どれだけ準備をしたとしても、必ず勝てる保証は存在しない。また、勉強についても、単位修得や就職の内定など、自分の力だけで解決されない部分もあり、日常生活でも、突発的な要因で不祥事が発生する可能性もある。したがって、結果に対する評価は大切であり、重視される必要はあるが、教育機関であることを考えると、環境作りなどのプロセスに対する責任も重視する必要があるといえる。しかし、これまでスポーツ界、特に学生スポーツでは、プロセスや取り組みの内容を評価し、社会に対して積極的に公表する努力は多くはなかった。本研究での報告は、野球部の取り組みにおける日常的な支援体制の評価であり、練習内容だけでなく、チームの方針や計画、規則などを自己評価し公表することは、今後の学生スポーツのモデルとなりうるであろう。

## 3. 野球部の取り組みに対する評価の課題

野球部に対するライフスキル教育の評価については、教育プログラムとしての理論的評価を行っているのが現状である。したがって、課題としては、実証的な評価システムを導入することの必要性を指摘することができる。特に、学生個人の変化に着目した第一次的評価はまだ実施されておらず、取り組むべき重要な課題といえる。しかしながら、今回、既存のライフスキル尺度を概観してきたが、各機関や研究者が実施している教育プログラムでは、独自の尺度を開発して評価を行っているため、野球部の事例にふさわしい心理尺度は非常に少ない。その中でも島本（2006）によるライフスキル尺度は一般性のある尺度であり、利用価値は高いと思われる。ただし、学生の変化を観察するためには心理尺度による測定を繰り返す必要がある。テスト実施の機会をうまく設定する必要がある。

また、第一次的評価を実施するためには、今回の事

例にふさわしい新たな尺度を作成することや、全く別の方法を用いることも1つの方法であり、心理尺度を用いずに本人や大学関係者に対するインタビュー調査を通して学生の変化を記述する質的研究は有効な手法となるであろう。半構造化インタビュー法によって、学生自身が感じている変化を抽出し、全体の傾向を把握する方法である。しかし、この方法を採用するには、半構造化インタビュー法に慣れた十分な数の研究者を確保する必要がある、この点では課題は残る。いずれにせよ、ライフスキル教育の評価システム構築には、学生自身の変化を客観的に記載する第一次的評価は必要不可欠となるのである。

#### 4. 大学競技スポーツに対する評価システム

松野ほか(2010)の報告や今回の報告では、学生ミーティングで使用された資料を用いて、学生の変化を読み解こうと試みられた。野球部の事例では、各ポジションの目標設定シートや毎日の練習でのルーティンチェック表、試合の観戦ノートなどミーティングを通して数多くの資料が作成されている。これらの資料は第一次資料として非常に貴重であり、十分に研究対象となるものである。つまり、学生の変化(第一次的評価)を抽出し、そのことを通して教育プログラムとしての評価(第二次的評価)を行うことが可能である。同時に、すべての資料を整理した野球部としての報告書を作成し、公表することは非常に価値の高い取り組みとなる。現時点で、これだけ精緻な取り組みを行っている組織体は少なく、他のチームのモデルともなると考えられる。

大学の運動部に対する評価は、主に競技力の面から行われることが多く、ライフスキル教育など全人的な教育プログラムや単位取得に対する学習支援など、総合的な評価はほとんど実施されていない。競技成績以外の評価としては、暴力事件や犯罪行為などの不祥事の発生に対して、各競技団体がペナルティーを科すことが評価に相当する事例といえる程度である。今後はライフスキル教育などを含めた包括的な観点から評価を行うことが望ましい。

野球部の実践に対する今回の評価は、自己点検に基づく自己評価であるが、今後、自己評価書に基づいて第三者による評価が実施されれば、興味深い価値のある取り組みとなる。これは、組織としての多様なステークホルダーに対する社会的責任ともいえるのである。そのためにも、体育会運動部やそこに所属するスポーツ選手を対象とする評価システムの構築、たとえば、認証評価などの形式で基準を作成し、第三者機関として、大学体育会運動部の認証評価するシステムなどの構築が期待される。

#### 参考文献

- アスリートのためのライフスキルプログラム研究会編, アスリートのためのライフスキルプログラム スポーツを通じた人づくり スタート教材, 2007
- 有賀誠司, 東海大学スポーツ医学研究所: 総合的な医科学サポートシステム, 臨床スポーツ医学, 22(4), 425-429, 2005
- Botvin GJ, Prevention of adolescent substance abuse through the development of personal and social competence. National Institute on Drug Abuse Research Monograph, 47, 115-140, 1983.
- Danish SJ, Hale BD, Toward an understanding of the practice of sport psychology. Journal of Sport Psychology, 3, 90-99, 1981.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. & Klein, P. Skill-Streaming the Adolescent: A structured learning approach to teaching prosocial skills. Research Press, 1980
- Darden, C.A., Ginte EJ. & Gazda, GM. Life-Skills Development Scale- Adolescent Form: The theoretical and therapeutic relevance of life-skills. Journal of Mental Health Counseling, 18, 142-163. 1996
- 原田隆史, 学生スポーツの不祥事を考える—日本におけるライフスキル教育, 京都高等教育研究センター 2009年度プロジェクト研究報告書, 89-93, 2010.
- 北海道大学高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部, 本学における「厚生補導充実化」方策の検討案—「競技力向上重視への厚生補導」への転換, 生涯学習研究年報, 12, 125-129, 2010
- 井上功一, 入口豊, 太田順康, 吉田雅行, 大学競技スポーツ組織の現状と今後の展望—アメリカ NCAA に焦点を当てて—, 大阪教育大学紀要第IV部門, 50(1), 193-210, 2001
- 井上功一, 入口豊, 杉村憲一, 吉田雅行, NCAA (全米大学競技スポーツ協会)の組織と問題点, 大阪教育大学紀要第IV部門, 48(2), 387-399, 2000
- 井上功一, 入口豊, 大久保悟, 日本の大学競技スポーツ組織に関する一考察, 大阪教育大学紀要第IV部門, 59(1), 1-12, 2010
- 金子元久, 大学教育の質的向上のメカニズム—「アウトカム志向」とその問題点—, 大学評価研究 8, 17-30, 2009
- 菊池章夫. 思いやりを科学する. 川島書店. 1998
- Kaufmann R, Keller JM, Levels of Evaluation: Beyond Kirkpatrick, Human resources development quarterly. 1994.
- Kirkpatrick DL, Techniques for evaluating training programs. In Evaluating training programs. Alexandria, VA: American society for training and development. 1975.
- 倉持梨恵子, 福林徹, 早稲田大学スポーツ医学クリニック: クリニック概要と今後の展望, 臨床スポーツ医学, 22(4), 419-424, 2005
- 久保公人, 学士課程教育改革の展望—中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の背景—, 大学評価研究 8, 9-16, 2009
- 前田早苗, 大学の質保証における認証評価が果たすべき役割

- について, 大学評価研究 8, 53-64, 2009
- 松野光範, 横山勝彦「ライフスキル教育」開発プロジェクトの必要性—スポーツ選手を視点に—, 同志社スポーツ健康科学, 1, 1-8, 2009
- 松野光範, 来田宣幸, 横山勝彦, 「ライフスキル教育」開発プロジェクトの実践と課題—硬式野球部の取り組みを事例として—, 同志社スポーツ健康科学, 2, 61-72, 2010
- 松繁寿和, 体育会系の能力, 日本労働研究雑誌, 537, 49-51, 2005
- 真山達志, ライフスキル教育の評価システム, 横山勝彦ほか編, ライフスキル教育, 昭和道, 145-152, 2009
- Murakami, K., Tokunaga, M. and Hashimoto, K. The relationship between health-related life skills and sport experience for adolescents. *Human Performance Measurement*, 1, 1-14, 2004
- 西園秀嗣, 鹿屋体育大学スポーツトレーニング教育研究センター: 大学における競技力向上支援システム, 臨床スポーツ医学, 22(4), 407-412, 2005
- 荻上紘一, 認証評価制度の問題点とこれからの改革の方向, 大学評価研究 8, 43-52, 2009
- 岡本純也, 大学スポーツが抱える今日の問題, 一橋大学スポーツ研究, 23, 35-40, 2004
- 沖裕貴, 観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造—理念・目標, ディプロマ・ポリシー, シラバスとの関連において—, 立命館高等教育研究 7, 61-74, 2009
- 小川勤, 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」と本学の教育改善の取組—答申内容と本学の教育改善システムとの比較(その1)—, 大学教育, 6, 49-60, 2009
- Phillips JJ, *Handbook of Training Evaluation and Measurement Methods* third edition. 1991
- Phillips JJ, *Return on investment in training and performance improvement programs*. 1997
- 島本好平・石井源信, 大学生における日常生活スキル尺度の開発. *教育心理学研究* 54, 211-221, 2006.
- 宇部一・樋口泰・菊原伸郎, 大学競技スポーツ選手へのコンディショニングに関する教育支援プログラムについて, *大阪商業大学論集*, 2(2), 75-85, 2006
- 上野耕平, 体育・スポーツ心理学領域におけるライフスキル研究の背景, *鳥取大学教育センター紀要*, 5, 175-188, 2008
- 横山勝彦, 来田宣幸(編)「ライフスキル教育—スポーツを通して伝える「生きる力」」昭和堂, 2009
- 吉田良治, 学生スポーツの不祥事を考える—アメリカにおけるスポーツ教育, 京都高等教育研究センター 2009年度プロジェクト研究報告書, 81-89, 2010.
- WHO 編, 川畑徹朗ほか監訳, WHO・ライフスキル教育プログラム, 大修館書店, 1997